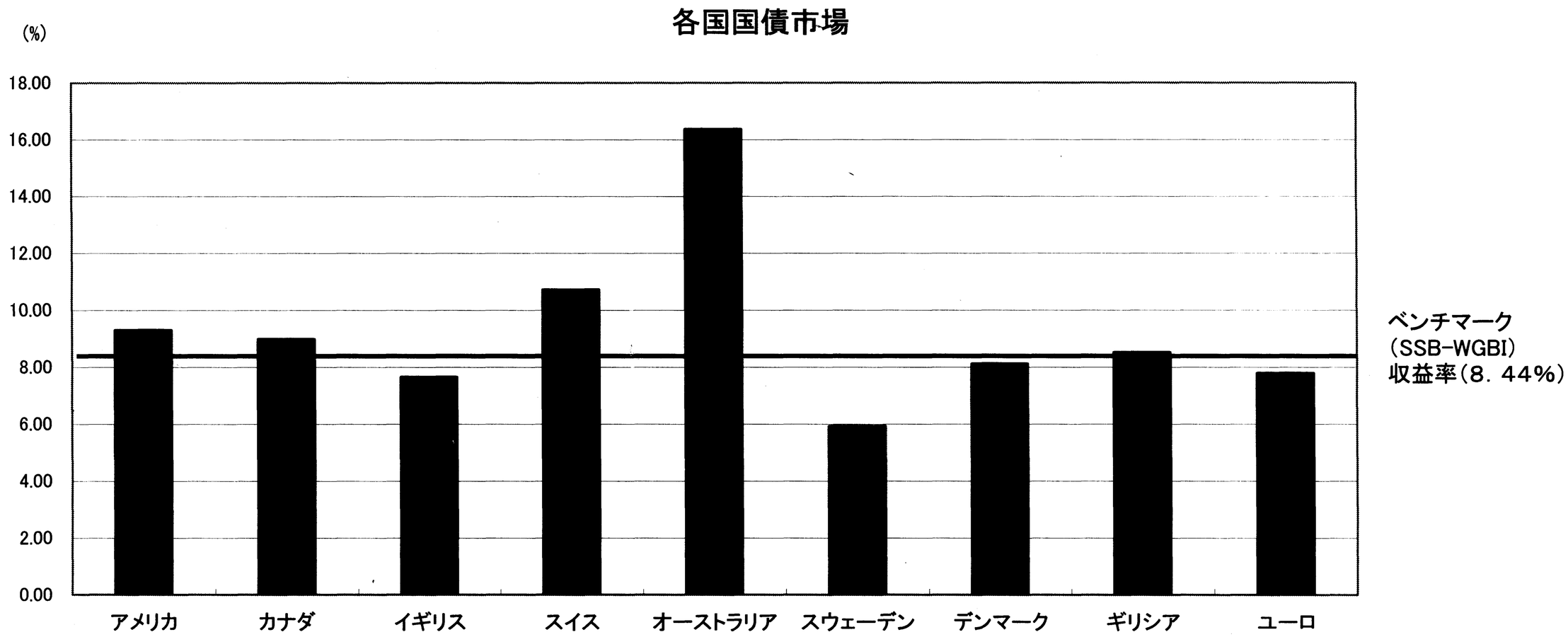
また、基金のベンチマークであるSSB-WGBIの収益率（8．44％）を各国国債市場でみると、円ベースの収益率に対する為替の効果（円安）が大きく影響しました。

オーストラリアやスウェーデンは共に現地通貨ベースの収益率は極めて低かったものの、オーストラリアは円安効果が大きかったことから円ベースで高い収益率となりました。



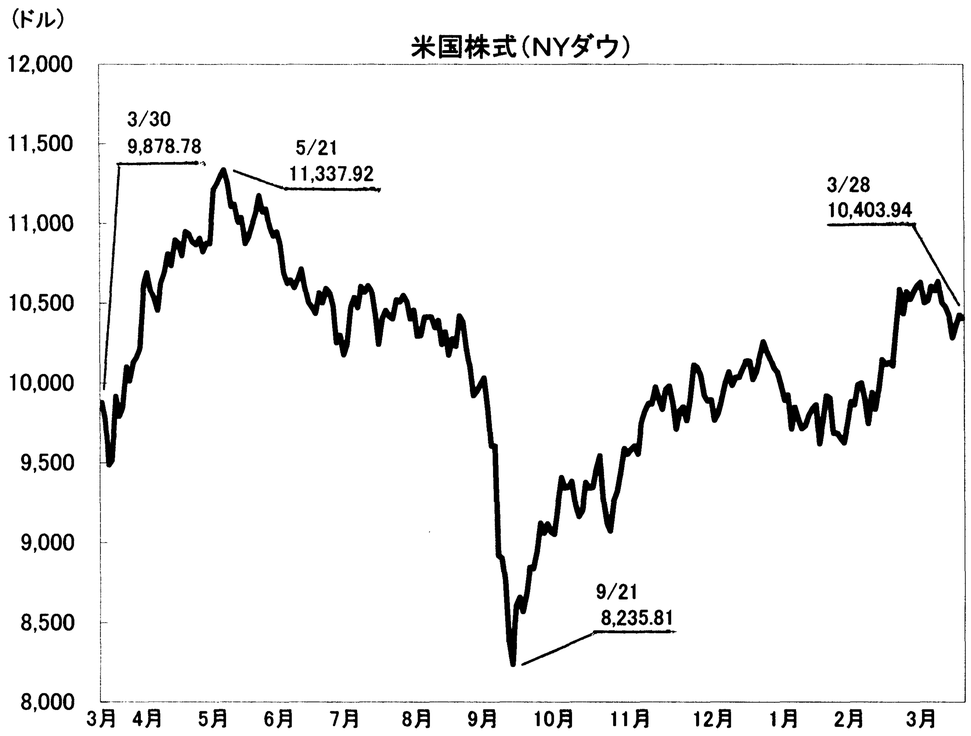
(4)外国株式市場

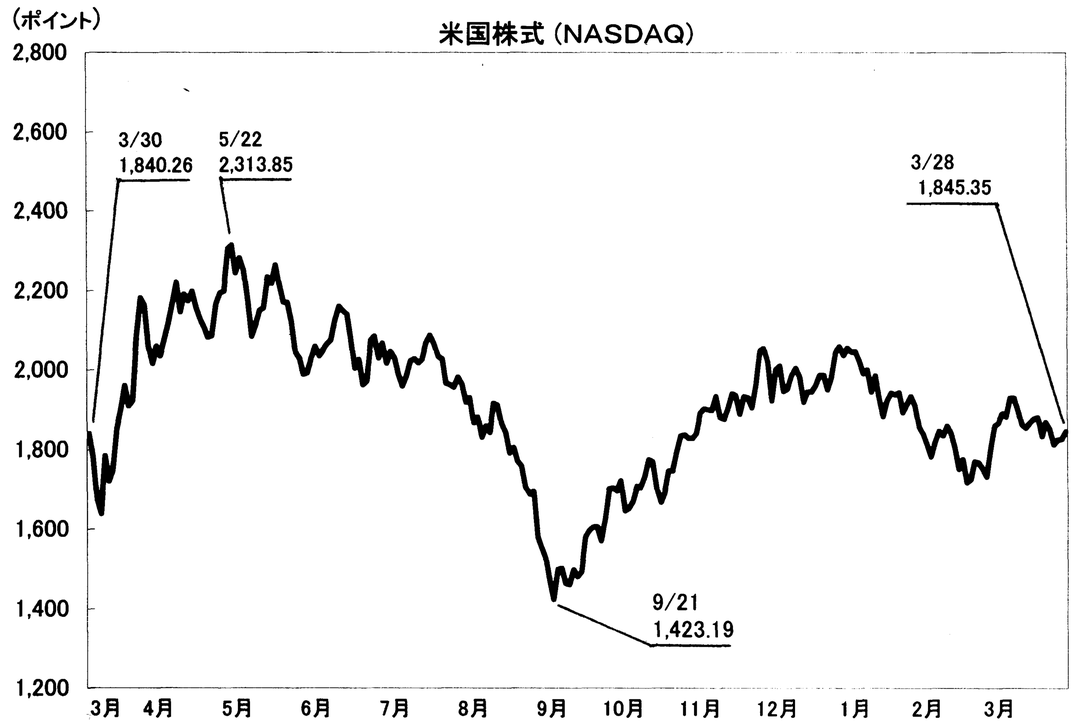
平成13年度の米国市場の動きを代表的指数であるNYダウでみると、平成12年度末の9，878．78ドルから平成13年度末の10，403．94ドルにわずかに上昇しました。また、ナスダックも平成12年度末の1，840．26ポイントが平成13年度末には1，845．35ポイントとなり、NYダウと同様の動きとなりました。

年度当初は、緊急利下げなど金融政策の効果から株価は上昇しましたが、景況感に改善の兆しが見られずIT産業を中心に企業業績の下方修正が相次いだ結果、株価は下落に転じ、さらに9月11日の米国同時多発テロの影響により株価は急落しました。

しかし、9月下旬以降パニック的な売りの解消、所得減税、追加利下げ、資金供給効果、アフガニスタン情勢の好転及び景気回復期待などから市場は好調な展開となりました。

その後、年末にはエンロン等の会計不正処理問題が発覚し一旦株価が下落したものの、景気回復を背景に年度末に向け市場は好調な展開となりました。





平成13年度の欧州市場の動きを、主要市場を占めるドイツのDAX指数でみると、平成12年度末の5，829．95ポイントから平成13年度末の5，397．29ポイントに下落しました。また、ドイツと並び主要市場である英国のFT100も、平成12年度末の5，633．7ポイントから平成13年度末の5，271．8ポイントと、DAX指数と同様に下落しました。

欧州市場は、米国株式相場に追随する動きでしたが、海外需要の低迷に伴う輸出の減少から生産活動の停滞など景況感に力強さが見られず、米国株式に比べ戻りの弱い展開となりました。